
少女は雷光を見たか

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女は雷光を見たか

【Nコード】

N6453Y

【作者名】

無銘

【あらすじ】

かつて家族や幼なじみと引き離された少女は、二人の男と出会う。一人はかつて仮面の男達を支え続けた男。もう一人は過去に少女が一度だけ見た赤い雷のような男であった。果たして少女は、男達は出会いの先に何を見るのか…。

キャラ崩壊、原作崩壊、知識不足その他が過分に含まれておりますのでご注意ください。

（前書き）

本作品は原作レイプを通り越して原作を背後からパイルバンカーで撃ち抜くくらいの所業をやらかしておりますので十分ご注意ください。

土砂降りの雨と雷が激しく降り注ぐ中、少女は走っていた。

己の姉を、生まれを、運命を呪いながら走っていた。

己の姉がISを開発したというだけで己を捕らえようとする者達から逃げる為に走っていた。

追っ手はISを装着している。

普段は何かとつけてしつこく監視をしている連中は今は仲良く伸されている。次会ったら給料泥棒とでも言ってやろう。次があれば、だが。

今日は剣道の全国大会に優勝したという本来なら晴れやかな日なのに実に最悪だ。

この土砂降りの雨と雷。

幼い頃から父に教わり、今では全国大会で優勝する程にまで打ち込んでいた筈の剣道が、実は今の自分にとって単なる憂さ晴らしの手段でしか無かったという事に気付いてしまった。

拳げ句の果てに姉のせいで、姉が発明したISに追い掛け回されている。

これを最悪と言わずして何と言えはよいのだろう。

ましてや姉の…今自分を追い掛け回しているISを生み出した姉のせいで家族と、そして想いを寄せていた幼なじみと長い間引き離されているのだ。

今は人生最悪の日と言っても過言ではない。

それでも少女は逃げる為に走るが誰かとぶつかり尻餅をつく。

男だ。ジャケットの中にSの字が書かれたシャツを着ている。両手には黒い手袋が嵌められている。

男は少女を助け起こす。そして少女がISに追われていると察すると

「逃げるんだ！」

と叫ぶ。そのまま少女は走り出し、やがて手近な隠れ場所を見つけると息を整え、追跡者をやり過ごすべく暫く隠れる事にした。

どれくらいの時間が経っただろうか。

土砂降りの雨が降り注ぎ雷鳴が轟く中、少女の視界にISが飛んで…いや飛ばされてきた。

まるで何かに思い切り蹴り飛ばされたかのようにISは吹っ飛び、少女の目の前で無様に地面に転がっていた。

搭乗者の意識はないようだ。

そしてそいつはそのISが吹っ飛んできた先から現れた。

赤いプロテクターに赤いライン、胸にSの字が書かれた赤いカブトムシだ。

そしてそのカブトムシは姿を変える…先ほど自分とぶつかった男の姿に。

男は見ている少女に気付いていないのか、ISの搭乗者が当分目覚めそうにないことを確かめると黒い手袋を両手に嵌め直し、立ち去っていった。

土砂降りの雨と雷が激しく降り注ぐ中、少女は…篠ノ之箒は赤い雷光を見た。

IS学園近くにある街の外れに位置する武術道場『大野練武館』。

ここには連日剣術や居合のみならず柔術、槍術、杖術などの武術を学び、腕を磨く為に多くの者が押し寄せ日夜稽古に励んでいる。

特に剣術に関しては全日本剣道選手権を6連覇した中屋敷を始めとする数多くの逸材を育て上げた事で名高く、名門道場として剣道界にその名を轟かせている。

その気合の声や竹刀や木刀で打ち合う男が絶えず響き渡る道場の片隅で、男と少女が胴着姿で正座した状態で対面していた。

男の方はこの道場の師範である大野。いかにも『道場の主』と言った感じの厳しい風貌に引き締まった肉体をしている。

対して少女の方は長い黒髪を後ろに纏め上げた髪型…所謂ポニーテールに歳不相応にスタイルの良い美少女、と一見するとこのむさ苦しい道場には場違いな感じがする。

だがこの男臭さが充満している道場に通う女性は意外と多い。

その女性の半数以上は近くのIS学園の関係者だ。

IS学園の教師であり、かつては名実共に最強のIS操縦者としてその名を轟かせた『ブリュンヒルデ』こと織斑千冬や、『暗部殺し』としてその筋では恐れられる更識家の第17代目当主である更識楯無などはIS学園から足繁く道場に通い詰めている。

特に織斑千冬は先述の中屋敷、その同期で中屋敷と劣らぬ技量を持ち、今では剣術指南を担当する撃剣師範代も務める岡田、全てを統括する総師範代として道場生を纏め上げる高橋、そして道場最古参の中村と飯塚の五人…通称『大野の五虎』と共に『大野の五虎一獅子』と並び称される程の技量の持ち主である。

実際千冬はあまりの強さからIS学園内では剣術の稽古相手が見つからず『大野練武館』の門を叩いた。

それでも千冬と互角に渡り合えるのは何かと他の後輩の指導に忙しい『五虎』くらいで、他は新堀や城谷がやっとなとも千冬とやり

合える程度なのでここでも練習相手が見つからなくて苦労する、と千冬は道場主である大野に零していたが。

そして今大野と対面して座っている少女もまたIS学園の生徒だ。

しかもその筋の人間が今座っている彼女を見れば、その凜とした佇まいや姿勢、何より纏う雰囲気とその隙の無さから、かなりの経験と技術を持った手練である、と分かるくらいの剣術の腕前の持ち主である。

「…珍しく太刀筋が荒れていたな、篠ノ之」

大野は口を開き目の前の少女…篠ノ之箒に語りかける。

彼女は中学3年生の頃に剣道の全国大会で優勝した経歴を持つ。

実際彼女は大体学校で言えば2学期が始まるかそれくらいの時期に道場に通うようになった最新参なのだが、元々の高い地力を短期間で更に向上させ、今では新堀や城田と共に『五虎一獅子』に次ぐ『三羽鳥』と称されている。

「それで真剣を振るっても例えどのような名刀を使えど巻藁どころか髪の毛一本すら切れぬぞ？」

そう言っただ野は箒の傍らに置かれている真剣…刀を見やる。

今日の箒は居合の稽古として巻藁を斬りに来た。

基本的に居合道では抜刀、納刀、及びその心構えを説く事を重視しており、巻藁のような何かを斬らせる事はあまりない。

だが『大野練武館』は例外で大野の許可を得られればいくらでも巻藁を斬っても構わない事になっている。

その許可を得るには大野の前で何回か素振りをして見せればいいのだが、大野は今日の筈の素振りからその太刀筋と心の乱れを見抜いていた。

「それ程の業物、ましてやお父上から譲り受けた大切な代物を無下に刃零れさせるわけにもいくまい」

筈の刀はかなりの業物であり、しかも彼女が長い事会えないでいる父親から譲り受けた大切な物だと大野は知っている。

刀：日本刀とは切れ味こそ異様なまでに鋭いが扱いが非常に難しい。きちんと刃筋を立てて斬らねば僅かなズレですらその切れ味は殺され、刃はこぼれる。

だからこそ大野は太刀筋に乱れは無いが、心に迷いは無いかを見るために素振りをさせる。

それに心に迷いや何か屈託があればそれは自然と太刀筋のみならず、足運びや呼吸などありとあらゆるものを乱す。それがごく僅かであっても真剣を扱う時には命取りになる。

特に巻藁を斬るならまだしも命懸けの真剣勝負であれば死に直結する。今は決闘は禁止されている為そんな機会は無いが、だからと言った真剣勝負に重要な心構えを疎かにする事は武術を嗜む者としては出来ない。

「さしずめ恋煩いと言った所か…確か織斑一夏君、だったか」

「何故それを…!？」

「そのような驚いた顔をするな。私とて人の子、木の股から産まれてきた訳ではない。それに岡田から大体の話は聞いているからな」

「…岡田さん！」

「いや悪い悪い、先生がお前の太刀筋乱れてるのは恋煩いが原因だろうって俺に聞いてきたからつい話しちまった」

箒は近くにいた岡田に文句を言うが岡田は人好きのしそうな笑顔を浮かべ謝る。

人なつっこい上に後輩の面倒見が良く世話好きな岡田は、新参の箒が早く道場に馴染めるようにとよく箒と話しており、剣術の話から恋の相談まで何かにつけて箒の話聞いていた。

さしもの岡田も箒やそれ以外の複数の女性から好意を寄せられ、しかも割合ストレートなアプローチをかけられても自分に向けられている好意に気付かないという、最早鈍感を通り越して悟りすら開いていそうな箒の想い人の話を初めて箒から聞かされた時は思わず絶句したが。

「それよりその『大野先生が恋という言葉を知ってるなんて!？』って言いたげな顔やめてやれよ…困ってるじゃねえか」

岡田の言葉を聞いて箒が大野を見ると確かに困ったように苦笑して

いる。

大野は常にストイックで弟子たちにも時に厳しく接するが、基本的には温厚な性格である。

同時に大野は自分の見た目や纏う雰囲気がいかに厳しいと人に感じさせるものであるかも知知している。

千冬の頼みで『五虎』を引き連れ特別授業としてIS学園の学生に剣術を指南しに行った際には、普段男を馬鹿にしていると聞いていた少女達が自分達を見た途端妙に大人しくなっていた。

いかにもプライドが高そうなイギリス人らしき少女に声を掛けたら明らかに怯えながら対応された。

活発そうな中国人の少女が言うことを聞かなかったたので、少しキツく叱ろうと軽く睨んだら泣きそうになりながら命乞いをされた。

眼帯を着けた銀髪の少女とはただ目が合っただけで直立不動で最敬礼された。

ブロンドの少女に至っては自分が直接指南しようと竹刀を向けただけで一夏という少年に向けての遺言を周囲に託していた。

もし中村や岡田のフォローがなければ授業すら成り立たず、貴重な時間を潰してしまったたとしてIS学園の教職員一同に土下座せねばならなかっただろう。

こんな経験をすれば嫌でも自分が他人からどう見られているかは分かる。

「とにかく今日はもう帰って、少し頭を冷やせ」

大野は表情を戻すと箒にそれだけ伝え立ち上がった。

街外れにある人通りが殆んどない河川敷を、箒は歩いていた。

制服に着替え直して道場を辞した後箒は刀…流石に布に包んで分らないようにしているが…を手に持ち当てもなく散策していた。

（ああしたのも久しぶり、かもしれないな…）

何故そうしたのかは分からない。

いつもよりたまたま不機嫌だったからなのかも知れない。

或いは今まで鬱屈としていたものがたまたまその時に爆発したからなのかも知れない。

自分と一夏を指導していた先輩が一夏にベタベタしているのを見た途端、箒は思わず一夏をたまたま手に持っていた竹刀で打ち据えていた。

その事に自己嫌悪しながら道場へ向かったはいいが、やはり見抜かれてしまった。

何となく一夏がいるIS学園には帰りづらい気がして今は頭を冷やすことも兼ねてこの辺りをブラブラと目的もなく散策している。

『モッピー知ってるよ！君がとってもいい子だって事！』

誰もいない河川敷で女が一人で人形を使って腹話術の練習をしているようだ。

その人形：『モッピー』とやらが何となく自分をデフォルメした感じに見えて思わずその頭を盛大に開放してやろうかとも思ったが止めておいた。

そうやって歩いていく内に箒は自分を尾行している気配に気付いた。

(…9人、いや10人か！)

思わず走り出そうとする箒だが

『モッピー知ってるよ！お前が篠ノ之箒だって事！』

先ほど腹話術の練習をしていたらしき女があの『モッピー』なる人形を持ち目の前に立っていた。

箒に感付かれず先回りしてきた辺り相当の手練らしい。

思わず腰を落とし構える箒。念の為刀を取出しいつでも鯉口を切り抜刀出来るようにする。

(…隙が、無い…！)

動いたら負ける。そう直感的に箒は悟る。しかし女の方は相変わらず『モッピー』を使い箒に語りかける。

『モッピー知ってるよ！お前が姉の篠ノ之束を大嫌いだって事！そして幼なじみの織斑一夏の事を大好きだって事！』

（何故その事を！？）

どうやらこの女は相当こちらの事を調べてきたらしい。

『モッピー知ってるよ！お前が大好きな一夏を独占したい事！そしてお前が一夏に擦り寄る泥棒猫は皆死ねばいいって思ってる事！』

「な、何を馬鹿な！？」

さしもの箒も思わず叫ぶ。当然だ。彼女達は…恋のライバルは大切な友人でもあるのだから。だが『モッピー』は止まらない。

『モッピー知ってるよ！お前がセシリア・オルコットなんてプライドが高いだけで本当はちよろいクセに一夏を誘惑しようとする馬鹿女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！」

『モッピー知ってるよ！お前が凰鈴音なんて自分より後から来たクセに一夏の幼なじみ面してベタベタする我儘女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！」

『モツピー知ってるよ！お前がシャルロット・デュノアなんて薄汚い妾の子のクセに一夏から愛称で呼ばれて馴れ馴れしくしてる腹黒女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！」

『モツピー知ってるよ！お前がラウラ・ボーデヴィツヒなんて血も涙もないクセにちよつと優しくされただけで一夏を「嫁」呼ばわりしている傲慢女なんか死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！違う！」

『モツピー知ってるよ！お前が更識楯無なんて何考えてるか分からないクセに先輩面して自分を差し置いて一夏とベタベタしてる性悪女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！違う！違う！」

『モツピー知ってるよ！お前が布仏本音なんて頭弱そうな事しか言わないクセに「おりむー」とか呼んで一夏にくつついてくる阿呆女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！違う！違う！違う！」

『モツピー知ってるよ！お前が更識簪なんて姉へのコンプレックスしか無いクセに一夏に勝手に理想のヒーロー像を抱いてる根暗女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！」

『モッピ―知ってるよ！お前が織斑千冬なんて家事も何も出来ないただ一夏の姉っただけのクセに自分を差し置いて一夏を独占しようとする暴力女なんて死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！」

『モッピ―知ってるよ！お前が自分が最初に出会って最初に惚れたのに後からノコノコやってきたクセに自分から一夏を奪おうとする下劣な女共は皆死ねばいいって思ってる事！』

「違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！違う！」

本当に違うのか？

ふと幕の中からそんな声が聞こえてくる。

本当に違うのか？

本当にそう思っていないのか？

本当にそう思った事は無いのか？

本当にそう思っていないという保証はあるのか？

本当はそう思ってるんじゃないのか？

(…！)

疑心暗鬼。一度囚われてしまえば後はどつぼにはまるだけ。篠ノ之箒には最早『モッピー』の言葉を否定出来なかった。しかし『モッピー』はまだ続ける。

『モッピー知ってるよ！お前がそんな事をいつも思ってる最低の女だって事！』

「…やめろ！」

必死に頭を振る箒だが『モッピー』は最早止められない。

『モッピー知ってるよ！お前がそのクセ怖いから優しい一夏に八つ当たりしかできない臆病な女だって事！』

「やめろ！」

『モッピー知ってるよ！お前が臆病だから力に溺れる事でしか自分を保てない弱い女だって事！』

「やめろ！やめろ！」

『モツピー知ってるよ！お前がだからこそ自分の力の無さを棚に上げて専用機さえあればと他人を妬むしか出来なかった卑屈な女だって事！』

「やめろ！やめろ！やめろ！」

『モツピー知ってるよ！お前がだから嫌いな筈の犯罪者の姉に専用機をねだった汚いな女だって事！』

「やめろ！やめろ！やめろ…やめてくれ！」

『モツピー知ってるよ！お前がそうやって汚い手を使って得た力で今度は他の女を見下すしか出来ない恥知らずな女だって事！』

「やめろ！やめてくれ！」

『モツピー知ってるよ！お前がそれどころか調子に乗って嫌いだった筈の姉と仲直りしようとか考えてる調子のいい女だって事！』

「やめてくれ…頼むからやめてくれ…頼むからもう…」

『モツピー知ってるよ！お前がそうやってまた姉から力をもらおうとか考えてる卑しい女だって事！』

「やめてくれ…やめて…お願いだから…もう…やめて…」

『モツピー知ってるよ！お前がそんな織斑一夏に愛される資格なんてこれっぽっちもない最悪の女だって事！』

「やめて…お願い…なんで…なんで…」

『モツピー知ってるよ！お前がそんな自分に気付かないフリをして織斑一夏の愛を独占しようとしている救い様もない女だって事！』

「…やめて…やめて…」

箒には涙を流しながらただだ『モツピー』に懇願する事しか出来なかった。

『モツピー知ってるよ！お前が…篠ノ之箒がそんな人並みの幸せを得る事なんか許されない生きている価値すら無い女だって事！』

それでもこの言葉の直後に女が撃った銃弾を擦ったとはいえ回避し、そのまま逃走へと転じられたのは剣士として染み付いた本能故だろうか。

『モツピー』を持っていた女の他に10人ほど追いかけてくるが、暫く走り続けると何とか振り切る事が出来た。しかし微塵も喜びも安堵もない。

（私は…私は…私は…）

やがて走り続けていくうちにつまずき、転がる。そこで箒の意識は徐々に薄れていく。最早、起き上がる気力すらも起こらない。

「…み！しつか…しろ！き…！？」

それから暫くした後には薄れ行く意識の中で誰かに声を掛けられていると知覚するが、それに応える事もなく箒は意識を闇へと手放した。

『モツピー』を持った女とその仲間らしき女達はアジトへと引き上げていた。

「まさか取り逃がすとは…油断したわね」

「擦ったとはいえ麻醉弾を食らったんだ。当分は逃げられまい」

「しかしよくあれだけの情報を調べられたわね？」

「こう見えても私はかなり長い間…それこそ彼女に保護プログラムが適用されてから彼女がIS学園に入学するまでずっと彼女を監視していたのよ？それに『織斑一夏』というヤツを調べれば自然と色々出てくるもの」

仲間に対し『モツピー』を持った女はニヤリと笑う。

織斑一夏という少年に関わった少女は大抵彼に惚れると同時に性格や言動がかなり変わる。それこそそれまでの同僚や家族が不審に思うレベルで、だ。

彼女達が所属している『組織』の情報網を活用してそれらの変化に関する情報を掻き集めて突き合わせて検討すれば大体の真相…織斑

一夏とその周囲の人間関係や抱いている意識というものは見えてくる。

「とはいえ半分くらいはハッキリなんだけど」

そう言つて彼女は『モッピー』をしまつ。

この『モッピー』という人形、意図的に篠ノ之箒にある程度似せて作つてある。

そちらの方が感情移入…この場合は箒に暗示をかけやすくなると踏んだからだ。事実彼女は抵抗する気力すら失つていた。

逃げられたのは最早本能レベルにまで刷り込まれた剣士としての心構えがあればこそだろう。

名前の方は適当で箒はモップ、だからちよつと捻つてモッピーと実に安直である。

「しかし今さらあんな女狙う価値あるのかねえ…」

「篠ノ之束との取引材料としてはうつつつけじゃないか。彼女を使つてISコアの製造法を聞き出すなりこちらに協力させるなり…せめてこちらと敵対させないくらいは出来るだろうさ」

「全く、『マスクドライダー』さえいなければこんな手間かける必要なんかないんだけどねえ…」

彼女達が所属する『組織』の目下最大の脅威は『マスクドライダー』というコードネームで呼ばれている謎の存在である。

奴らは『組織』の計画を次々と発見しては潰してきており、今では『組織』の動きはかなり制限されてきている。

幸い『組織』はこの世界の至る所に深く根を下ろしている為そこまです『組織』そのもののダメージは大きくは無いがこのままではジリ貧になる一方だ。

だからこそイギリスの第3世代ISで実験機の『サイレント・ゼフィルス』をわざわざ強奪するというリスクを犯してまで戦力の拡大に専念してきた。

だがその『サイレント・ゼフィルス』も…IS学園を襲撃した際には操縦者の技量もあり複数の専用機持ちと単機で互角以上に渡り合ったそれも、『国際宇宙開発研究所』を襲撃した際には現れた『マスキドライダー』一人に撃退されたと聞いている。

幸い『サイレント・ゼフィルス』は機体も操縦者も何とか戦場から離脱は出来た為組織で回収出来たが、操縦者の『エム』はその屈辱から荒れに荒れているらしい。

そんな状況では『白騎士事件』以来何かと世界をひっかき回している篠ノ之束まで敵に回す事態を『組織』としては避けたかった。

そこで彼女が大切に思っている妹の筈をこちらで確保し篠ノ之束を牽制し最低でも中立に、あわよくば味方にしようという事でこの作戦が立案された。

勿論かなりのリスクが伴うが『組織』としてもこの状況を打開すべくそれくらいリスクを覚悟せざるをえないのだ。

「何にせよインターポールやIS学園に感付かれると厄介よ…この

先は慎重にね」

『モッピー』の持ち主がそれだけ言つと女達はめいめい解散した。

箒が意識を取り戻したのは布団の中であつた。

畳敷の和室の真ん中で箒は布団に寝かされていた。

服装は制服姿のままだ。銃弾が擦つた右腕を見ると処置を施されていたのかしつかりと傷口に包帯が巻かれている。

枕元には持っていた刀がちゃんと置いてあつた。

外を見るとすっかり暗くなっている。部屋に掛けてあつた時計を見ればもう9時だ。

（一体ここは…？）

箒は起き上がると改めて部屋の中を見渡す。何かのトロフィーが何個も飾つてある。

とりあえず部屋の外を探索すべく襖を開ける。廊下に出て階段を降りると玄関先らしい土間が見えたのに気付きそちらへと向かう。

オイルの匂いだ。車やバイクによく使われているオイル独特の匂いがその先から漂ってくる。

自分の靴は土間にきちんと揃えてあったのでそれを履いて玄関らしき場所に出てみる。

（…バイク？）

そこは玄関ではなくバイク屋の店内であった。何台か修理中と見られるバイクが置いてある。

暫く周囲を見渡していると

「おっ、気が付いたみたいだね」

バイクの陰から男性がひょっこりと顔を出し簾に声をかける。

バイクの整備でもしていたのか所々が汚れた作業姿に軍手、首にタオルを巻き、手にはレンチらしき工具を持っている。

歳は初老、といった所だろうか。作業していた為か顔の所々も若干煤けている。

「いや、驚いたよ。バイクで走ってた所をたまたま倒れてた君を見つけたんだけど…ま、とにかくそこに掛けなよ」

男はそう言って一回タオルで顔を拭い穏やかな笑みを浮かべながら簾に手近な椅子に座るように勧める。

「…失礼します」

箒は男に一礼すると椅子に腰掛ける。

「まあ、何だ、まず自己紹介といこうじゃないか…立花藤兵衛だ。君は？」

「…篠ノ之箒です」

男：立花藤兵衛に対し箒は名乗る。

「箒ちゃんか…その制服から察するに君はIS学園の生徒だよね？何なら俺の方から連絡して迎えに…」

「…駄目！」

藤兵衛の言葉を箒が遮る。

戻りたくなかった。あんな…あんな話を聞かされた後では心の整理が出来るまでIS学園に帰って誰かと会いたくなかった。

「…すいません…IS学園に…連絡は…しないで…頂けますか…？」

箒はうなだれた状態で藤兵衛に謝罪する。

「…分かったよ。その様子じゃ訳ありみたいだしね」

「…お手数をおかけします」

「気にしないでいい。それよりコーヒーでも飲んで落ち着きなよ。」

こう見えてコーヒーの味には少し自信があるんだ」

頭を下げる筈に藤兵衛は笑って首を振りコーヒーを入れ、筈に渡す。

「ありがとうございます。なら、いただきます…」

藤兵衛からコーヒーを受け取ると一口飲んでみる。

「…美味しい」

「口に合ってたみたいで良かったよ」

素直に感想を呟く筈に藤兵衛は満足そうに笑って頷く。

別にコーヒー党という訳ではないがこのコーヒーは素直に美味しいと思う。少なくとも市販の物とは比べ物にならないくらいに美味しい。

これを飲んだら「紅茶こそ至高。コーヒーなんて泥水」なんて常々言ってるセシリアみたいなイギリス人だって…

（セシ…リア…？）

モッピー知ってるよ！お前がセシリア・オルコットなんてプライドが高いだけで本当はちよろいクセに一夏を誘惑しようとする馬鹿女なんて死ねばいいって思ってる事！

「あ…あ…あ…」

モッピー知ってるよ！お前がそんな事をいつも思ってる最低の女

だつて事！

「い…いや…」

モッピー知ってるよ！お前がそんな織斑一夏に愛される資格なんてこれっぽちもない最悪の女だつて事！

モッピー知ってるよ！お前がそんな自分に気付かないフリをして織斑一夏の愛を独占しようとしている救い様もない女だつて事！

モッピー知ってるよ！お前が…篠ノ之箒がそんな人並みの幸せを得る事なんか許されない生きている価値すら無い女だつて事！

「いやあああつっ！！」

箒はコーヒーの入ったカップを落とし頭を抱えながら絶叫する。

「ど、どうしたんだい！？」

突然の変貌ぶりに慌てた藤兵衛が止めに入るが既に箒は錯乱状態になっていた。

（私は！私は！セシリアを！皆を！死ねば…死ねばいいと！！）

ひたすら叫び必死に頭を振って思考を振り払おうとするがすれずるほどどんどん深みにはまっていく。

「…すまん！」

意を決した藤兵衛が箒の頬を張る。

「…あ…」

痛みが頬に走ると篤はやっと我に返る。

「落ち着いたかい？」

黙ったまま篤は申し訳なさそうに頷く。

「…そうだな、少し俺の話でもしようか」

本当はあいつらと…仮面ライダー達と一緒に戦っていたかった。

立花藤兵衛は仮面ライダーと呼ばれる男達を支え続けてきた。

時には厳しく、時には優しく、まさに父親同然に彼らに愛情を注ぎ、彼らの戦いを『シヨッカー』との戦い以来影に日向に支えてきた。

そして仮面ライダー達もまた立花藤兵衛を息子のように慕い、『おやっさん』と呼び親しんだ。

その『おやっさん』は『デルザー軍団』との戦いを最後に仮面ライダー達の戦いを支える事は無かった。

まだいけると思ってた。犠牲になった人達の…岬ユリ子の為にもまだいけると思ってた。

だが仮面ライダー達に止められた。最初は粘った。だけどあいつが…茂が…

沼田五郎と、岬ユリ子の墓を頼みます。

断れなかった。そんな事をあいつに…城茂に言われて断れるはずが無かった。

だから後は旧知の谷源次郎…今はそう名乗っている…に後を託し、俺は戦いから身を退いた。そして茂の親友の、そして愛する者の墓を守り続けてきた。

全ての組織が壊滅すると時たまあいつらは俺の所に顔を出すようになった。嬉しかった。息子同然だったんだ。嬉しくないはずがない。

「…あのトロフィーはその時の…」

「ああ、それでも昔は『攻めの立花』と言われたもんさ」

藤兵衛は筈に自分の事を話していた。現役のレーサーだった頃の事、喫茶店のマスターもやっていた事、そして『あいつら』のコーチ…『おやっさん』として経験した事。

とはいえ流石に仮面ライダーや悪の組織の事までは話していない。そもそも猛の経歴を聞いて啞然としてたんだからそんな話をしたら尚更だろう。

逆に藤兵衛は箒の事を殆ど聞こうとしない。あんな反応を見せた直後だ。どんな些細な事がきっかけになってもおかしくはない。

そつこうしている内にドアを叩く音が聞こえてくる。

身構える箒を制すと藤兵衛は警戒しながら尋ねる。

「どなたですか？」

「俺だよ、おやっさん」

その声を聞けば誰か分かった。当然だ。息子同然の『あいつ』の声だ。聞き間違えるはずはない。

そのままドアを開ける。

「久しぶり、おやっさん」

「よく来たな…茂！」

立花藤兵衛の目の前には城茂が立っていた。

暫くドアの前で再会と互いの無事を喜び合っていた城茂と立花藤兵衛だが、茂はふと誰かの視線に気付き、視線の主である少女に気付く。

「おやっさん、彼女は？」

「おっと、すっかり忘れてた。彼女は…」

「…篠ノ之箒です」

少女…篠ノ之箒は自ら名乗ると一礼する。

（彼女は確かISで追われていた…？）

茂は一度ISで追われていた彼女を助けている。茂も高々一人の少女相手にISを持ち出してまで追跡していた、という異様な光景であつた事から彼女の事も記憶していた。

しかしそれをおくびにも出さずに

「篠ノ之さん…だったね。前に俺と何処かで会わなかったかな？」

「…いえ。人違いだと思います」

箒は首を振り否定する。

（やはり何かの事情があつて、という事が…）

忘れている、という可能性も最初は考えたがそれは低い。でなければ俺を見た時一瞬とはいえあんな驚いた表情をすることも、その後

俺を何かと確かめるように観察する事もないだろう。

つまり何か事情が…しかもそうそう人には話せない事情があるという事だろう。

「これは失礼。改めて…俺は城茂。よろしく頼むよ、篠ノ之さん」

「はい、こちらこそ。城さんの話は立花さんから伺ってます」

改めて茂は名前を名乗る。どうやらおやつさんから俺の話聞いていたようだ。

「しかしお前も随分丸くなったなあ…あ、箒ちゃん。俺は暫く茂と話してるから先に休んでいいよ。あの部屋は今は誰も使ってないから好きにしてくれていいから」

「…ではお言葉に甘えて先に失礼します」

箒は二人に一礼すると二階へと上がっていく。

「…おやつさん」

「分かってる。かなりの訳ありだつてな」

箒が二階に上がって暫くした後二人は箒の事について話していた。

「俺がここに来る途中で何人か不審な動きをしている女達を見かけたんだ」

「銃で撃たれた傷もあったし一体どうして…?」

「彼女に何か変わった様子とかは?」

「…コーヒーを飲んでたらいきなりパニックを起こしてな。余程の目に遭ったんじゃないかと思う」

「…ならおやっさん、俺に考えが…」

こうして夜が更けるまで茂と藤兵衛は再会の思い出話もそこそこに篠ノ之箒の事と今後の対応について話し合っていた。

朝の道を二台のバイクが走っていた。

「悪いね、箒ちゃん。こんな時間に」

「いえ…そんな。それに私ができるのはこれくらいしか…」

一台は立花藤兵衛が運転しており、篠ノ之箒がその後ろに乗っている。

藤兵衛ともう一台のバイクに乗っている城茂は墓参りに行くと聞いたのでせめて恩返しとして墓掃除くらいは、と思って申し出た。あまりにあっさり承諾されたので少々拍子抜けしたが。

「そろそろ到着だから準備はしておいてくれ」

という言葉聞くか聞かないかの内にバイクは止まり、二人が降りたので箒も後に続き花束を二つ持って二人について行く。

一つの花束の花は百日草、もう一つの花束は百合の花だ。

森の中にある道を通っていくとだいぶ開けた場所に出た。

その先にある海に面してやや突き出た岬のようになっている土地に墓は、あった。

墓碑にはそれぞれ

『沼田五郎之墓』

『岬ユリ子之墓』

とだけ記されている。

茂は箒から花束を受け取ると百日草を沼田五郎の墓に、そして百合の花を岬ユリ子の墓に供えて手を合わせる。同様に藤兵衛も手を合わせる。

「久しぶりだな、五郎…ユリ子…元気にしてたか？」

そして茂は沼田五郎と岬ユリ子がまるで目の前にいるかのように語り掛け始めた。きっと茂にとって沼田五郎は大切な友人であり、岬ユリ子は心から愛していた人であろうという事は、話を聞いている

だけで分かった。

「…羨ましい」

ポツリと、箒が呟く。

羨ましかった。沼田五郎が、岬ユリ子が…死して尚、こうして愛され大切にされている二人が純粹に羨ましかった。

「…何を言ってるんだい？」

「そうだよ、箒ちゃん。何が羨ましいんだい？」

二人は穏やかに、しかし訳が分からないといった感じで箒に聞き返す。

「…私は、死んでもそんな風に悲しんだり、大切にしてくれたり人なんか居ませんし…そんな価値もありませんから…」

「何を言ってるんだい箒ちゃん！？君にだって…」

「私は…！」

慌てて否定しようとする藤兵衛を箒が遮る。そして自暴自棄となり二人に思いの丈をぶちまけ始める。

「私は！皆を…一夏に近づく女は皆死ねばいいと思ってる最低な女なんだ…！」

「私は！いつもそんな事を思ってる一夏に愛される資格なんてこれ

つぽつちもない最悪の女なんだ!!」

「私は!そんな自分に気付かないフリをして一夏の愛を独占しようとしている救い様もない女なんだ!!」

「私は…私は!そんな人並みの幸せを得る事なんか許されない生きている価値すら無い女なんだ!!」

「そんな私の事なんか誰も心配しない!誰も大切になんかしない!死んでも誰も悲しまない!私は…私は…私なんか、生まれてこなければよかったんだ!!」

言い終わった直後箒は思い切り頬を張られ…いや張り飛ばされる。

思わず転がり倒れ、起き上がろうとする箒だが、自分の視線先にいる自分を張り飛ばした男を見て動きが止まる。

そこには静かに…しかし凄まじいまでの怒りを燃やして箒を睨み付けている城茂の姿があった。

「…生きる価値がないだと?…誰も心配しないだと?…誰も大切にしないだと?…誰も悲しまないだと?…生まれてこなければよかっただと?…」

許せなかった。たとえ彼女にどんな事情があろうとも、それを、こ

こで言う事だけはどうしても許せなかった。

「沼田五郎の前で」

五郎。お前とはしょっちゅう喧嘩して、馬鹿やって、一緒に笑ってたよな。

一緒に城南大学入って、偶然出会って、軽い気持ちでアメフト始めたの、覚えてるか？

練習、キツかったな。プレイ覚えるの、大変だったな。学業との両立、死ぬかと思ったよな。

でも勝ちたいと、思ったよな。もつと強く、なりたかったよな。

甲子園ボウル、行きたかったよな。ライスボール、出たかったよな。

だからお前はQBクォーターバックとして、俺はRBランニングバックとして、4年間ずっと頑張ってきたよな。

何回も何回もお前とハンドオフの練習して、何度も何度も試合でハンドオフしたよな。

お前がミスれば俺が怒鳴って、俺がミスればお前が怒って、そうやって何回も何回もミスりながらタイミング合わせ続けてきたよな。

だから始めてプレイが通った時、嬉しかったよな。始めて俺がお前からボールハンドオフされてタッチダウン決めた時、滅茶苦茶喜んだよな。

お前が相手のLBラインバックにタックルされてもそれをそいつら引き摺りな

がらパス投げて通したの、今でも誇りに思ってるぜ。

俺が相手のD^{ディフェンス}Lを吹っ飛ばしてヤード稼いでみせたの、お前誇らしげに見てたよな。

だから俺もお前も後輩達にアメフトの楽しさを、勝つ喜びを、強くなる実感を教える為に一生懸命チーム引っ張って、後輩の面倒見てきたよな。

けどお前はもう居ない。

お前は死んだ。ブラックサタンに殺された。

辛かったよな？ 痛かったよな？ 苦しかったよな？ 悲しかったよな？ 後悔も未練も無念も一杯あったよな？

もっと、勝ちたかったよな？ もっと、強くなりたかったよな？ 甲子園ボウル、行きたかったよな？ ライスボウル、出たかったよな？

もっと喧嘩して、馬鹿やって、笑っていたかったよな？

でもお前はもう居ない。

お前とはもっと喧嘩してたかった。お前とはもっと馬鹿やってたかった。お前とはもっと笑い合いたかった。

でもお前は死んだ。ブラックサタンに殺された。

お前がいなくなって俺も辛かった。苦しかった。痛かった。悲しかった。後悔も未練も無念も一杯あった。

だから俺は、ブラックサタンと戦えた。

「岬ユリ子の前で」

ユリ子。お前とはしょっちゅう喧嘩したけど、意地張ってばっかだったけど、ずっとずっと好きだったんだぜ？

一緒にブラックサタンの基地から逃げ出して、一緒にブラックサタンと戦うって決めたよな。

辛い時もあつたな。苦しい時もあつたな。やっぱり喧嘩した時もあつたな。

でも連中には負けたくなかったよな。この世界を守って、平和な世界にして、そして

その為にお前は『タックル』として、俺は『ストロンガー』として、一緒に戦い続けてきたよな。

何度も何度もお前と一緒にブラックサタンの企みをぶっ潰して、何回も何回も奇械人をぶっ倒してきたよな。

いつもいつも手柄を巡って喧嘩して、意地を張り合って、そうやって何度も何度もぶっかかりながらブラックサタンと戦ってきたよな。

だから始めて連中に勝てた時は嬉しかったよな。始めて連中の野望を阻止出来た時は喜んだよな。

俺はお前がいたからこそずっとずっと『仮面ライダーストロング
ー』として戦い続けてこれた。

だからお前には本当なら『岬ユリ子』という一人の女に戻って欲
しかった。

お前、一度俺がなぜ仮面ライダーって名乗らないのか聞いた時「
未練、かな」って言ってたよな？

今ならその意味が分かるぜ。お前は孤児の俺と違って家族が…お
前と一緒にブラックサタンに攫われ、そして殺された家族がいたも
んな。

だから、『岬ユリ子』の名前を捨てたくなかったんだよな。

そんないじらしくて、愛しいお前はもう居ない。

お前は死んだ。デルザー軍団から俺を助ける為に死んだんだ。

辛かったよな？ 痛かったよな？ 苦しかったよな？ 悲しかったよ
な？ 後悔も未練も無念も一杯あったよな？

もつと喧嘩してたかったよな？ もつと意地張ってたかったよな？
平和な世界と一緒に見たかったよな？ もつともつと ずっと一緒に
いたかったよな？

でもお前はもう居ない。

俺はお前ともつと喧嘩してたかった。お前ともつと意地張ってた
かった。お前と平和な世界と一緒に見たかった。お前ともつともつ

とずっと一緒に、いたかった。

でもお前は死んだ。デルザー軍団から俺を助ける為に死んだんだ。

お前がいなくなつて俺も辛かった。苦しかった。痛かった。悲しかった。後悔も未練も無念も一杯あった。

だから俺は、デルザー軍団をぶっ潰せた。

「二人の前で」

そんな辛くて痛くて苦しくて悲しくて 後悔も無念も未練も一杯あって もっともっと ずっと生きていたかった二人の前で

「絶対にそんな事言うんじゃない！！」

茂は箒に咆哮する。そして

「……いい加減出てこい！悪いが今の俺は少し気が立ってんだ！」
自分達を監視していた者達が隠れている木々を睨み付けて叫ぶ。

「あら、バレた。まあいいわ。手間が省けたもの」

黒いプロテクターらしき物を着用した11人の女達が姿を現し、茂と藤兵衛と箒の前に立つ。立ち上がり身構える箒の様子からして彼

女を銃撃したのは真ん中のリーダー格らしき女らしい。

「大人しく彼女を引き渡せば貴方達二人は解放してあげるわ。でも断れば…」

リーダー格らしき女が合図をするとその女以外の10人の女達は瞬時に黒いISを装着した状態となっていた。

「馬鹿な!？」

「IS自体を量子化していた!？」

茂と箒は同時に驚きの声を上げる。

無理もない。IS自体を量子化し、『待機形態』と言われる形:大抵アクセサリー型になるが:で持ち運び、いざという時に展開・装着する機能はISの中でも『専用機』と呼ばれる物に限られる。

少なくとも『専用機』に近い改造を施された量産機でもなければこのように瞬時にIS展開・装着する事は出来ない。

入れ替わった様子もない限りあのプロテクターはかなり改造が施されたISスーツなのだろう。

箒はそれを見ると左手首に巻かれた金と銀の鈴が付いた赤い紐に手をかけるが、

『モッピー知ってるよ!お前が生きている価値も無いクセに姉にねだって手に入れた汚い力を:そのISを使って生き延びようとあがく醜い女だって事!』

リーダー格の女が『モッピー』なる人形を取出し腹話術で箒に語りかけるとビクツと身体を震わせ、手を放す。

（IS…姉…篠ノ之…そういう事か！）

茂には今まで篠ノ之箒に抱いていた疑問や彼女を取り巻く状況を理解する。

彼女はISの開発者である篠ノ之束の妹なのだろう。現在ISの中核部であるコアの情報を握っているのは束のみだ。そこで女達は妹である彼女に目を付け束との取引材料として確保するという事を決めたのだろう。

ならば合点がいく。わざわざたった一人の為にISを10機も持ち出した事も、そしてそれだけの数のISを…しかも専用機に近い性能を持つであろう機体を用意出来るだけ組織がリスクを犯して動くだけの理由がある。

（となるとこいつらは…やはり『亡国機業』！）
ファントム・タスク

そしてそれだけの規模がありここまで露骨に非合法な手段を辞さない組織は最早『亡国機業』くらいしか残っていない。

茂が今まで戦ってきた組織に比べれば科学力や危険度こそ劣るが、社会への浸透度や根の深さでは圧倒的に優れる厄介な連中だ。

現在茂やその先輩後輩達が戦っている新たな『悪の組織』だ。

「彼女も『汚い力』を使ってまで抵抗する気もないみたいだし…大人しく引き渡してくれないかしら？」

「…嫌だと言っただら？…おやつさん！」

「任せろ！」

茂に答え藤兵衛は箒を連れて後ろに下がる。

すると『モッピー』がISの待機形態だったのか、その持ち主も瞬時に黒いISを展開・装着していた。

そして茂も黒い手袋に手をかけ…

「…そうだな。『汚い力』を使って生き残るのは、嫌だな」

たところで止め箒にそう言つたそのまま素手でISに殴り掛かっていった。

「何で…何で…？」

箒には生身で単身ISに挑むという茂の行動が理解出来なかった。

確かに茂は強かった。最初は余裕の表情を浮かべていた女達も今では焦って銃や近接用ブレードまで取り出してまで茂を止めにかかっているが茂はまだ立っている。

「…どうした…全然…効いちゃ…いねえぞ…」

ただし茂の方は既にボロボロだ。何度銃撃され、斬撃を受けたのだらうか。最早立っているのもやつとだらう。むしろ今までこうやって立ってるのがおかしいくらいだ。

「何で『あの姿』になって戦わないんですか!？」

箒はボロボロになって尚素手で戦い続けている茂に向かって叫ぶ。

箒には分かる。きっとあの時の…カブトムシみたいな姿になって戦えばここまでボロボロになる事は無かったと。

「…そうか…あの時…俺を見てた視線は…君だったのか…殺気は無かったから…放置してたんだが…まさか…『変身』を…解除してる所まで…見られてたとはな…俺も…ヤキが回った…もんだぜ…」

しかし茂は箒の問いには答えずに銃弾の雨を被弾覚悟で突っ切り、ISを殴る。

「…君はあいつの…茂の…『ストロンガー』の姿の茂を見た事があるんだね?」

黙って頷く箒を見ると藤兵衛は続ける。

「…あいつには親友が居たんだ。沼田五郎…あの墓に眠っている沼田五郎って親友がな。彼は悪の組織に…『ブラックサタン』に殺されたんだ。そしてあいつは…茂は…親友の仇を取る為に自らブラックサタンに志願して『力』を…改造人間の身体という『力』を手に入れたんだ」

「…！」

「勿論それは演技だった。そしてあいつは同じく改造手術を施された女と…『岬ユリ子』と共に人々を守る為、正義の為にブラックスタンと、そしてその後から出てきた悪の組織と戦い続けた…最愛の岬ユリ子を失っても、だ」

「…篝ちゃんの事情はよく分からない。けどあいつが得た改造人間の身体…『ストロンガー』の力は君が思ってる『汚い力』なんだ。例えばそれを正義の、人々の為に使っても、力を得た経緯が『復讐の為に自ら悪の組織に身体を差し出した』事である以上、あくまでそれは『汚い力』なんだ」

「で、でも何で生身で…！？」

「…あいつは昔から『捻くれ者』で、『意地っ張り』で、『格好つけたがり』で、『不器用』で…そして『優しい』ヤツだったからな…きつとこうするしか思い浮かばなかったんだろう」

篝は沈黙するしか無かった。自分の力は…『赤椿』は経緯が『他の連中を見返す為だけに犯罪者である姉にねだった』という実に『汚い力』だ。或いは城茂という男はそれにも気付いていたのかも知れない。

「…がつ…！？」

戦況を見直すとさしもの茂も斬撃と銃弾を受けすぎたのか身体中から血を流し、もう倒れそうである。だがそれでも膝すらつかずに立ち向かおうとしている。

「茂！…この野郎！」

藤兵衛は倒れそうな茂を見るといてもたってもいられずISに素手で殴りかかるがあっさり弾き飛ばされる。しかし藤兵衛は怯まず立ち上がると再びISへと向かっていく。

「行け！箒ちゃん！ここは俺達で食い止める！俺の…茂の為にも逃げてくれ！」

また殴りかかり、また弾き飛ばされ、また立ち上がりながら藤兵衛は箒に叫ぶ。しかし箒は動けない。

かちり、と何かが背中中で音を立てる。

刀だ。背中に背負う形でこちらに持ってきていた刀だ。

刀を背中から下ろし、布を取り払う。

（立花さんを…城さんを助けなければ！）

何もかもが意識から吹き飛び、ただそれだけの一心だった。

気が付くと箒は気合と共にISに斬りかかっていた。

刀でベッドすら刃零れさせずに両断可能なその剛剣の前に、さしものISも道を開ける。

「立花さん！今の内に城さんを！」

「分かった！」

今にも倒れそうな茂を藤兵衛が支えて後ろに下がるのを確認すると
箒はそのまま刀を振るい奮戦する。

…とはいえ所詮は生身1人、IS11機の敵では無い。やがて箒は
刀もろとも弾き飛ばされ、地面に仰向けに倒れる。

「手間かけさせないでよ…これでおしまいね」

11人の女たちは箒を取り囲み、ゆっくりと…しかし確実に歩きな
がら包囲の輪を狭めていく。

そして箒に手を伸ばし…

「…その娘に…触るんじゃねえ!!」

切る前に背筋が凍る程の殺気を感じし思わず振り返る。

そこには先程箒に見せたそれすら生易しく感じる程の怒気を発して
仁王立ちする男…城茂がいた。

茂の肉体には至るところに流血と傷があった。

しかし茂は藤兵衛の支えを借りず自らの足で大地を踏み締めていた。
そして茂は女達を無視して幕に語りかける。

「…皆死ねばいいと思ってるだろ？違うだろ！その娘達と仲良く出来て…会えて良かったとも思った事もあっただろ！？」

そうだ。私は皆と一夏の取り合って、鈍感さに溜め息をついて、
応援して、笑い合って…皆と出会えて良かったと思つた事は嘘なんかじゃない。

「…愛を独占しようとしているだろ？違うだろ！彼の為にその身を…全てを投げ出しても構わないと思つた事もあっただろ！？」

そうだ。「銀の福音」との戦いの時に一夏の為なら命を…全てを投げ出しても構わないと思つた事は嘘なんかじゃない。

「救い様が無いだろ？違うだろ！誰かを…俺を…おやっさんを助ける為に無心で戦ってただろ！」

そうだ。あの時立花さんを、城さんを助けたいと思つた事は嘘なんかじゃない。

「だったら…君のライバルが君を心配しないと思うか！？」

違うな。皆私と一夏を取り合って、一緒に溜め息をついて、励まし合って、笑い合って…優しい皆がそうしてきた私を心配しない筈

が無い。

「君の想い人が君を大切に思っていないと思うか!？」

違うな。一夏は確かに鈍感だが優しくて『銀の福音』の時も命懸けで私を守ろうとしてくれた。そんな一夏が私を友人としてだが大切に思っていない筈がない。

「俺が…おやつさんが…俺達が君の死を悲しまないと思うか!？」

違うな。わざわざ出会ったばかりの私の為に命を張って無茶をしてくれている。そんな人達が私の死を悲しまない筈がない。

「確かに君は最低かも知れない…最悪かも知れない…救い様はないのかもしれない…だが、君には生きている価値はある!たとえ君がそう思っただけでも!君を心配してくれる皆には!大切に思ってくれる想い人には!悲しんでくれるおやつさんには!俺には!君に生きてもらう価値があるんだ!君にずっと生きていて欲しいんだ!」

「だから!その人達の為にも生きて生きて生き続ける!最低と言われても!最悪と罵られても!救い様が無いと言われても!その人達の為にも生きる事にしがみつけ!その為ならどんなに『汚い力』を使っただけでも!最後まで諦めずに足掻いてみせる!」

筈にそれだけ言うと茂は膝を地面に付く。余程堪えたようだ。

聞こえるか、『紅椿』。心があるなら、聞いてくれ。

私は最低な女かもしれない。最悪な女かもしれない。救い様のない女かもしれない。

でも私は生きたい。心配してくれている皆の為にも、大切に思っ
てくれている一夏の為にも、悲しんでくれる立花さんと城さんの為
にも。

一度はお前を『汚い力』と拒んだ私だ。厚かましい頼みかもしれ
ない。

だけど、頼む。皆の為にも、一夏の為にも、立花さんと城さんの
為にも 今一度、今一度だけでいい

お前の力を、私に貸してくれ！！

それに応えるように箒の身体を展開した『紅椿』が包み込む。

「ちっ！こんな事で…！？」

動揺する女達を『紅椿』を纏った箒はスラスタ―出力を最大にしな
がら突撃し蹴散らすと、藤兵衛と茂を抱え上げ、そのまま一瞬で敵
を見渡せる高台へと飛ぶ。

そこで二人を降ろすと箒は強い決意を抱いた目で敵を見定める。 1
1人。他にはいない。少々数は多いが今の私なら問題ない。

（ありがとう、『紅椿』）

心の中で自らの無茶に付き合う愛機に礼を述べつつも二人を振り返る。

「ありがとうございました、立花さん、城さん…今度は私が貴方達を守ります!」

「…いや、君は俺を『手伝って』くれればいい」

しかし茂は立ち上がると箒に歩み寄る。その顔には不敵な笑みを浮かべていた。

(ヘッ、間抜けだぜ)

茂は心の中でそう呟く。

俺達はお前らを誘い出す為にわざと彼女を外に連れ出した。そしてお前らはまんまと引っ掛かりやがった。

まさか二人の墓の前でこんな事になるとは思わなかったけどよ。

「あの、城さん…」

「…何だい？」

「どうして私を…そこまでして助けてくれるんですか？」

当然の疑問だな。俺だってそう思うだろう。

けどな…『分からない』んだ、俺にも。

君に五郎を…沼田五郎を重ねていたのかもしれない。

君にユリ子を…岬ユリ子を重ねていたのかもしれない。

君に俺を…昔の俺を見てたのかもしれない。

俺が単なるお人好しだからなのかもしれない。

それが俺の『正義』だからなのかもしれない。

はたまた君を狙い、君の心を踏み躪り、君の未来を狙おうとする奴らがブラックサタンやデルザー軍団に重なって許せなかったからなのかもしれない。

だが俺には分からない。だから君への答えは『分からない』、だ。

だけど俺は『分からない』なんて事を君には言わない。

俺は昔から『捻くれ者』で、『意地っ張り』で、『格好つけたがり』なんだ。

だから、君にこう答える。

「そんな事…」

…こう言うのは久しぶり、かもしれないな。

「そんな事…俺が知るか！」

それだけ言つと不敵に笑い、黒い手袋を外し、コイルを巻かれた腕を出す。

俺は復讐の為に自ら悪の組織に身体を差出し、力を得た。俺の身体はそんな汚い、呪われた代物だ。だが今の俺は決してそれを後悔なんかしていない。

それで俺の正義を、信念を、魂を、生き様を貫けるのなら

それで人々の、そして篠ノ之箒の命を、人生を、笑顔を、幸せを、心を、未来を守るのなら

それで沼田五郎の、岬ユリ子の後悔を、無念を、未練を、思い出を、生きた証を背負えるのなら

そしてそれで今日の前にいる悪を討ち滅ぼせるのなら 後悔なんて、あるわけがない！！

両手を右横に突き出し、ゆっくりと左斜め上へと持っていく。

「変身…ストロンガー!!」

そのまま両手を擦るように動かすと茂の身体にスパークが走り、その姿をカブトムシを模した電気を操る改造人間…『電気人間』のそれへと変える。

気高く可憐に咲く一輪の紅い椿を守るように、雄々しく鮮烈に輝く一筋の赤い雷光は前へと進み出て、自らの名前を高らかに名乗る。

「天が呼ぶ! 地が呼ぶ! 人が呼ぶ! 悪を倒せと俺を呼ぶ!」

「聞け! 悪人共! 俺は正義の戦士!」

「仮面ライダー…ストロンガー!!」

その身に正義と魂を宿し、苛烈に悪を撃ち据える赤い雷光…7番目

の仮面ライダー『仮面ライダーストロンガー』は名乗り終えると篠ノ之箒と共に悪へと戦いを挑んだ。

「電…パンチ！」

城茂：仮面ライダーストロンガーは敵のISに対し電撃を纏った拳を叩き込む。純粋な威力のみならず電撃による追撃まで加わり、ISのシールドは削られる一方だ。堪らず後退する。

「この！たかが一人に…！」

仮面ライダーストロンガーは地上で6人を相手にしていたが優勢に戦いを進めていた。敵の一人がアサルトライフルを向けて仮面ライダーストロンガーに放つが

「遅いぜ！電キック！」

そのまま飛び上がった仮面ストロンガーに逆に電撃を纏った飛び蹴りを浴びせられる。

その威力の前に食らったISの『絶対防御』が発動するが、ISは大きく吹き飛び、そのまま沈黙を余儀なくされる。

「まずは1つ！」

そのまま仮面ライダーストロンガーは残りの5人を睨み言い放つ。

「さっきまでの威勢はどうした？ビビって声を出す気力もねえってか？」

「…小癪な！上よ！上に逃げればヤツは追い付けないわ！」

そう言つて上に逃げようとするが…

「こちらも1つだ！」

『紅椿』を纏つた箒に斬り捨てられたISが地面に落下して盛大に叩きつけられたのを見て思い留まる。

上空では箒が単身奮戦していた。

身に纏う『紅椿』は第4世代ISである。各国が漸く第3世代の開発に着手した中で束から箒に渡された『紅椿』は、全てにおいて既存の機体を遥かに凌駕する性能を誇っていた。

箒はその性能を最大に生かし敵を翻弄、そのまま肉迫し、自慢の剛剣を存分に敵に叩き込んでいた。

逃げようとすれば『雨月』のレーザーで追撃し、囲もつとすれば『空裂』のエネルギー刃で切り払う。

「クソ！何で…何であんなの使つてエネルギー切れになんないんだよ！？」

箒と対峙していた敵が悲鳴のように叫ぶ。

ISには切り札とも言える『ワンオフ・アビリティ単一仕様能力』と呼ばれる特殊能力が存在する。

この『紅椿』の単一仕様能力『絢爛舞踏』はISのエネルギーを百倍まで増大させるというものである。

すなわち『紅椿』はこの『絢爛舞踏』が発動している間はほぼエネルギー切れを無視して戦える。

その為高性能だが燃費が悪い装備で固めている『紅椿』が長時間戦えるのだ。

もつとも、それをこうして今自在に発動出来るようになったのは先輩の指導と彼女の努力の賜物だが。

箒は敵の銃撃を悉く回避すると一機とつばぜり合いの形に持ち込む。

「これで…2つ！」

そのまま摺り上げるようにつばぜり合いから脱すると敵を斬り捨て、次の標的へと目を付け、『雨月』を構える。

八双…むしろ示現流と言う『蜻蛉』の構えだ。そのまま『二の太刀要らず』とまで言われた示現流自慢の初太刀と同じ要領で敵に一気に踏み込み、敵の防御ごと叩き斬る。

「これで3つ！」

「だが隙だらけだよ！」

嘲るように敵が追撃をかけてくる。

示現流は『攻め』を重視する剣術だ。故に守りは軽視し、『受け』を持たない。かの新撰組局長近藤勇をして恐れさせた示現流の初太刀だが、それさえ終わればどうにでもなる…というイメージを持たれがちだ。

実際は『受け』こそあまりないがその分回避や見切りを重視した複雑な流派である。現に箒は敵の攻撃を全て見切り、回避している。

痺れを切らした敵が勝負に出ようと近接用ブレードを振り上げた瞬間、箒はスラスターを一気に噴かし抜き胴の要領で一撃を…『後の先』の一撃を加え、敵を地面に叩き落とす。

「これで4つだ！」

一方地上では仮面ライダーストロンガーが2機のISから放たれたワイヤーで両腕を拘束されていた。

「これで終わりだ！」

「黒焦げのトーストになっちまいなよ！」

そしてそのまま仮面ライダーストロンガーに高圧電流を流し込む。

「…わざわざ有難う…よ！」

しかし『電気人間』である仮面ライダーストロンガーには効かない

所か逆にパワーを与えただけに過ぎなかった。

そして逆にワイヤーを持ったまま勢いよく回し始める。

「こいつはお釣りだ、とつときな…エレクトロファイヤー！」

十分遠心力をつけると仮面ライダーストロンガーはお返しとばかりに2機に高圧電流を流し込みながら他の2機へと放り投げ、4機纏めて沈黙させる。

「これで5つだ！」

そして仮面ライダーストロンガーは地上でリーダー格の女を…箒は空中でもう一人の生き残りを見据え冷たく言い放つ。

「…あとは、お前だけだ」

空中の敵は閃光弾で箒の視界を一瞬眩ますとパッケージらしきブースターを装備し、一目散に逃げ出した。

「逃げるが勝ちさ！この『ライティング』パッケージに追い付けるものか！」

実際単純な加速性能や最大速度だけなら現段階での『紅椿』すら上回っているだろう。

（だがそれでは回避行動など全くとれまい）

しかし筈は敵の装備の弱点を見抜いていた。

それだけのスピードを求めれば当然だ。ロケットと同じだ。

しかし舐められたものだな。どうせ剣術馬鹿の… 武術馬鹿のお前にまともな飛び道具など扱える筈などないと高を括っているのだろう。

否定はしない。私は銃の扱いは苦手だ。仮にあってもお前に当てる事は出来ないかも知れない。

だが忘れたか？ 知らなかったか？

（剣術は… 武術は戦場で生まれたものだ！）

戦国期の剣術の使い手は得てして他の武器の扱いにも長けている事が多い。戦場で必要な以上必然だろう。当然ながらその中には『弓』も含まれる。

例え使う武器が違えども基本は同じだ… それが弓であろうとも。

『紅椿』の両肩展開装甲が変形し、弓… クロスボウの形を取る。

（『紅椿』よ、再び私に力を示せ… そして！）

PICを全て機体支持に回し、精神を極限まで集中させる

「穿て！ 奴よりも速く！！」

そしてクロスボウ…『穿千』から放たれた一撃必殺の閃光は一瞬の内に敵を撃ち落としていた。

(…どうやら下も決着らしいな)

ハイパーセンサーで下の様子を捉えると少しした後篇はスラスタ―を噴かし地上へと向かった。

尚も足掻く女だったが、仮面ライダーストロンガーの猛攻の前に手持ちの武器は全て破壊され尽くしていた。

「化け物め！いつか必ずこの屈辱は…！」

それだけ言い残すと『ライティング』パッケージを呼び出し、全速力での離脱を図ろうとする。

だが、逃がさねえ。

「チャージアップ…！」

そして仮面ライダーストロンガーは切り札を切る。

己の体内に埋め込まれた『超電子ダイナモ』を起動させ、プロテクターに銀のラインが入り角も銀に染まった『超電子人間』としての姿へと変わる。

この姿は1分間しか保てない代わりに通常の100倍という圧倒的なパワーをストロンガーにもたらず。

それだけあれば、今目の前から逃げようとしている悪を倒すには十分だった。

ヤツが飛び立つ直前に一気に飛び上がり、上をとる。そして言うやる。

「止まって見えるぜ、お前の動きはよ」

そいつの絶望したような顔が見える。だが自業自得ってヤツだ。

そのまま『超電子ダイナモ』から溢れだす力を足に込める。そして身体を螺旋の…ドリルのように高速回転させ、渾身の蹴りを放つ。

「超電子ドリルキイイイック!!」

そして少女は 篠ノ之箒は一人の男と一人の女の後悔と無念と未練と生きた証を背負い、闇を切り裂き燦然と輝く一筋の赤き雷光の姿を、確かに見た。

夕暮れの中、城茂と立花藤兵衛、そして篠ノ之箒は沼田五郎と岬ユリ子の墓の近くに佇んでいた。

「そろそろ迎えが来てもいいころだと思っただけだな…」

「あれだけ派手に暴れたらIS学園側でも嫌でも気付くだろうけどね」

そんな事を藤兵衛と茂が話していると、

「箒！」

「…一夏!？」

どうやら迎えが来たらしい。しかもよりによって箒の想い人…織斑一夏のような。まだ遠いのかこちらからは声しか聞こえない。

「立花さん、城さん、お手数をおかけしました」

「いいいいいよ、気にしなくて」

「それより早く行ってきた…たまには抜け駆けってのも悪くないもんだぜ?」

穏やかに笑う藤兵衛と悪戯っぽく笑いウィンクしてみせる茂。

「あの、最後にもう一度…本当に、ありがとうございました!」

微笑みながら二人に一礼すると箒は声を上げ、一夏の下へと走っていった。

箒と一夏が談笑しているのを藤兵衛と共に遠目で見守りながら、茂はふと一夏と箒に自分と愛する者を重ね合わせ、思いを馳せる。

ユリ子、これでいいんだよな。こうやってあの子が普通に笑って、普通に恋をして、そんな平和な世界が、お前も見えたかったんだよな

「…おやつさん」

「…言うな」

「…でもおやつさん」

「…何も、言うな」

「…けどおやつさん」

「…だから、言うな」

「…いくら何でも彼女の『お前の隣で笑顔でいたい』発言を聞いて『なら今度一緒に寄席でもいくか』って答えはないと思っぜ？」
「…篝ちゃんの恋の行く末は大丈夫なんだろうか…？」

「流石に彼の鈍感さばかりはいくら俺でも…」

「…どうしようもないだろうな」

…その後暫く篝と一夏の会話を聞いていた城茂と立花藤兵衛が、
「

仮面ライダー』とその『おやっさん』でもどうしようもない織斑一夏の鈍感さと、そんな彼に恋をした篠ノ之箒の将来を憂い溜息をつくのは、また別の話である。

（後書き）

拙作をお読み頂きありがとうございます。

今回も悪戦苦闘し何とか書き上げられましたが、相変わらずの文才や構成力の無さを恥じるばかりです。

尚、本作を含めた仮面ライダーとISのクロス作品は特に断りが無い限り同じ設定、世界観という前提で書かせていただいております。

とはいえ特に他の作品を読まなくても大丈夫なようには努力しておりますので参考程度に聞き流して頂ければと思います。

最後にもう一度、拙作を最後までお読み頂き、誠にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453y/>

少女は雷光を見たか

2011年11月19日20時29分発行